

コラム 人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

「自分で決める」ためのポイント

基本的に集団で生活する学校（学級）においては、「自己決定が大切」とは言え、それが「自分勝手な決定」であってはいけません。その決定が「自分勝手な決定」でなく「正しい自己決定」になるためには、決定する際の妥当性の検討が必要になります。私はその妥当性の判断基準は、①その決定が自分の成長のためのものであること、②その決定が周囲（他者）の尊厳や権利を侵害しないこと、の2点だと思っています。この基準を同時に満たす決定こそが正しい「自己決定」だと思っています。児童生徒の考えを尊重しつつ、時には「それは自分のためになっている？」「友達の考えは侵害していない？」と問いかけることも必要なのかもしれません。「その時、その場でどのような行動が適切か？自分で考え、決め、実行する力」、つまり生徒指導により児童生徒が獲得することを目指している「自己指導能力」が重要なのです。

自己決定する際に、児童生徒によっては周囲と異なる決定をする場合もあるでしょう。しかし、この周囲と異なる決定が実はハードルが高く、不安を伴います。教室では、自分の考えを押さえ込んで集団に同調することで安心するという姿も見られるかもしれません。自己決定の妥当性①からすれば、そもそも「正しい決定」ではないのですが、和を重視する日本人社会ではよくあることとも言えます。では、周囲と異なる決定を勇気を持って行うにはどうすればよいか？私は「心理的安全性（「対人的なリスク」のある行動を行っても大丈夫だとメンバーみんなが信じられる状態）」が鍵だと思っています。集団心理学の研究では、これを高めるためには集団のリーダーの姿勢が重要だとされており、ポイントは、「①リーダーは、挑戦するメンバーが失敗しても大丈夫なように支える「安全基地」である」「②部下が冒険できるようになるには、リーダーの「思いやり」とリーダー自身の「挑戦」の両輪が必要」の2点。学級集団のリーダーである先生はどうですか？

（高橋）

人権教育・生徒指導課のホームページもご覧ください。
<https://www.pref.okayama.jp/soshiki/350/>



Vol.12

発行日 令和7年10月

岡山県教育庁 人権教育・生徒指導課

生徒指導

Leaflet @ OKAYAMA

リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

自己肯定感を高める②

自己肯定感を高めるための手立てについての第2回。今回は、生徒指導の実践上の4つの視点のひとつ「自己決定の場の提供」の観点から考えてみます。

岡山県教育庁
人権教育・生徒指導課

〒770-8570
岡山県岡山市北区内山下2-4-6
Tel:086-226-7589 Fax:086-224-2134

Q. 自己肯定感を高めるには、教師はどのように関わればよいですか？

A. これまで多くの学校で学力向上や自己肯定感を高めるために、児童生徒の「わかった・できた」体験を大切にした授業や特別活動が重視されてきました。いわゆる成功体験の積み重ねです。この考え方自体は間違いではないと思いますし、「わかった・できた」体験をさせるために、現場の先生方が非常に丁寧に一人ひとりの児童生徒に関わってくださっている姿を拝見しています。

特に1学年1クラスで、児童生徒数が10人を切るような小規模校において、先生が一人ひとりに寄り添い、授業中も休み時間も何か困ったことがおきるとすぐに駆けつけて解決してくれる。児童生徒はそんな先生に絶大の信頼を置き、「先生、大好き」と言ってくれる。そこにはとても温かみのある関係性があり、見る者には「良い学校（クラス）」との印象を与えます。

決して、丁寧に関わることを否定している訳ではありませんが、丁寧な支援が行き過ぎると、先生方の善意が逆に児童生徒相互の助け合い（＝有用感を得る機会）の場面を奪ってしまっているのかもしれないと考えることはできないでしょうか？

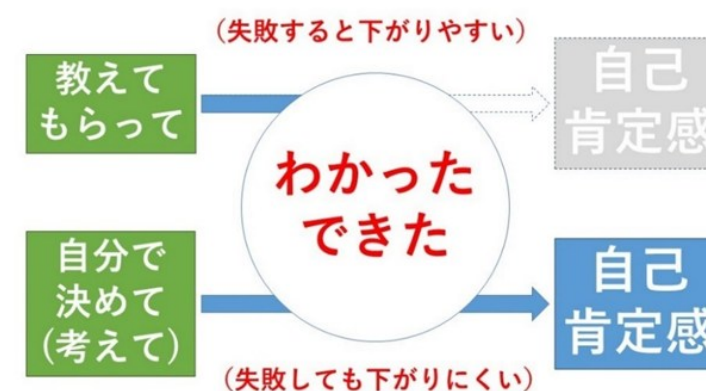
「自己決定」と自己肯定感の関係

児童生徒に「わかった・できた」と感じさせる方法は二通りあると思っています。一つ目の方法は、「教えて（指示して）もらって」取り組むことによる「わかった・できた」経験です。この方法は多くの児童生徒が「わかった・できた」と感じますが、実はこの方法では自己肯定感は大きくは向上しないのではないかと考えています。言われた通りにやった結果の「わかった・できた」は、ある意味、当たり前であり、児童生徒の達成感はあまり大きくないからです。逆に、万が一「言われたとおりにやったのに」うまくできなかったならば、自己肯定感は大きく下がるかもしれません。

一人ひとりに丁寧に
関わること

「分かった・できた」を感じさせる
二つの方法

一方、もう一つの方法、「自分で考えて（決めて）」取り組んだ結果としての「わかった・できた」経験は、その過程が教師や大人から見れば、非効率的であり、妥当性を欠いていたとしても、自己肯定感は高まる方向に作用するように思います。たとえ失敗しても下がることはないでしょう【図】。



【図】自己決定と自己肯定感

これからの学校の在り方が問われている？

これまでの学校、学校に限らず社会全体が結果や効率（成功体験）を重視するあまり失敗を過度に回避したり、効率性ばかりを重視したりする傾向があったのかもしれません。保護者や地域の期待もあり、学校現場が成功体験を重視せざるを得なかった状況は理解できますし、先生方の日々のご努力には頭が下がる思いですが、生徒指導の実践上の4つの視点のひとつ「自己決定の場の提供」が「自己肯定感」向上の鍵を握っているのではないでしょうか。そういう意味でも、『提要』が目指す発達支持的生徒指導の重要性をすべての先生（保護者を含めた大人）が理解し日常的に実践することが大切なのかもしれません。

不透明で答えのない社会を生きていく児童生徒に必要な力（エージェンシー）を育む上で、失敗してもやり直せばよいという体験をいかに保証し、友達や先生と助け合いながら試行錯誤していくことの楽しさや、Vol.11で触れた学校や地域のために自分も役に立っているという経験を、学校教育の中にどのように位置づけるか、確かに非効率的な取組かもしれませんが「生徒指導と学習指導の一体化」の視点から考えてみませんか。

これからの社会を
生きていく力を育
むために



『提要』のダウンロード
はこちら

POINT

- ① 児童生徒に「丁寧に関わる」ことを一度、振りかえってみる
- ② 児童生徒は「わかった・できた」をどのルートで得ているか？